

The Fulbrighter
in
Nagoya

No.35

February 2026

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter in Nagoya No.35

目 次

1. 巻頭言 塚田守

2. 講演

山本恵里子 元椛山女学園大学教授、元全米日系博物館プロジェクトマネージャー

テーマ：「国際オーラル・ヒストリー学会(IOHA)クラクフ大会とポーランド
—日本のアイヌドキュメント映像詩『大地よ』は何を語れたか—
IOHA クラクフ大会 (2025年9月16-19日)に参加して」

3. 会務報告

総会

会則

役員名簿

1. 巻頭言

名古屋フルブライト・アソシエーションの皆様、いかがお過ごしでしょうか。

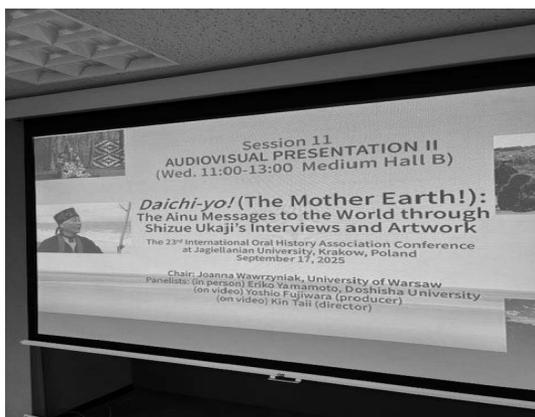
The Fulbrighter in Nagoya No.35 をお届けいたします。前回の加瀬先生と同じように、山本恵里子先生にも 2 回目の講演をしていただきました。メーリングリストでの案内の配信になって、実質的に連絡している会員の皆様の数も減少しつつありますが、今年の総会では新しく 2 名が会員になってくださいました。町田奈々子先生（南山大学）と坂和秀晃先生（名古屋市立大学）です。なお、町田先生には来年度の総会での講演をしていただくことになっております。

総会でも報告しました通り、会費納入の人数は少なくなり、会の財政事情は危機的状況になっています。この 2～3 年は今までの繰越金なども取り崩し、どうか会の運営をしたいと考えております。今回の総会・講演会の参加者は去年の 30 名以上と比較して少ない 11 名でしたが、この数年来の平均的な人数です。人数は少ないのですが、講演後の懇親会に皆様が参加してくださり、いろいろな話をして盛り上がった会になっていたと思います。その意味でも会の存続は意味あるものだと考えています。

それ以上に、この 10 年間のそれぞれの講演者の熱量は素晴らしく、講演後の質疑応答は、専門などが異なるにも関わらず、活発なものになっています。それは、ひとえに、同窓会の講演者の講演の質の高さによるものだと思います。今年度の山本先生は、国際学会で発表したことの内容を個人的な経験も含めて話してくださり、なかなか興味深いものでした。その後、このニュースレターに投稿されている原稿は、講演当時には聞けなかった、歴史背景や学問的背景（オーラルヒストリー研究など）についての加筆もあり、読み応えのある文章になっていると思います。会員の皆様全員読んでくださることを願っています。

塚田 守
会長兼事務局

総会の講演会の様子を示す画像を張り付けておきます。



2. 講演

「国際オーラル・ヒストリー学会(IOHA)クラクフ大会とポーランド —日本のアイヌドキュメント映像詩『大地よ』は何を語れたか— IOHA クラクフ大会 (2025年9月16-19日)に参加して」

山本恵里子

フルブライト研究員プログラム(1998-99年、UCLA)

イースト・ウエスト・センター博士課程奨学生 (1982-86年)

国際オーラル・ヒストリー学会(IOHA)
クラクフ大会とポーランド

アイヌ ドキュメント映像詩『大地よ!』は何を語れたか

名古屋フルブライト・アソシエーション&イースト・ウエスト・センター中部同友会 2025年度講演会
2025年11月8日 椋山女学園大学 学園センター

山本 恵里子
同志社大学アメリカ研究所嘱託研究員/グローバル地域文化学部嘱託講師
1998-99 フルブライト研究員(UCLA)/1982-86 EWC PHD STUDENT PARTICIPANT
(元 椋山女学園大学教授・全米日系アメリカ人博物館プロジェクト主任・愛知みずほ大学特任教授)



はじめに

去る9月16～19日にポーランドのクラクフ市にて、国際オーラル・ヒストリー学会(International Oral History Association 通称 IOHA)第23回大会(隔年)が開催された。パンデミック中はシンガポール大会がオンライン開催になったが、2024年リオデジャネイロ大会から対面にもどり、今回はヨーロッパでの開催となった。ロシアのウクライナ侵攻の影響が懸念されたが、ウクライナ難民の聞き取りにも積極的なクラクフが選ばれ、世界各地からオーラル・ヒストリー研究者がヤギェウォ大学に集った。

2000年からIOHAに関わり始めた私にとって、大会参加は4度目(うち1回はオンライン)となる。今回は自分の専門である日系移民史ではなく、日本で制作されたアイヌ民族のオーラル・ヒストリー・ドキュメンタリー映画を通して、世界から集うオーラル・ヒストリー研究者・実践者にその映画の評価を問うとともに、アイヌ民族の歴史と文化を知ってもらうことを目的とし、オーディオビジュアル発表のセッション(パネル)として採択された。

今回、本同窓会にてIOHA大会参加報告をする機会をいただいたので、その経緯・背景と私のパネル・セッションの内容をご紹介します。時間の許す限りで映画『大地よ』の一部を見ていただく予定である。

IOHA とは

まずオーラル・ヒストリーとは、人々の語る過去の記憶を収集・保存し、歴史資料として現在そして後世において活用・解釈できるようにする手法である。口述で歴史を伝えるという人間の古くからの営みではあるが、20 世紀中頃から録音機器（オープン・リール・テープレコーダー）の普及に伴い、それを活用したインタビュー形式の口述史・聞き書き手法が欧米を中心に発達し、政治家などの著名人から労働者階級やマイノリティの名もなき人々の記憶を音声と文字で組織的に残そうという運動になっていった。本を書くことのない人々でもインタビューであれば話してくれるから、と対話により直接経験談を聞き出すのだが、史料として価値のあるものにするために、インタビュー手法と記録方法、そして公開方法が工夫され続け、「オーラル・ヒストリー」の信頼性を高める努力が続けられてきた。

その発展に付随し、西欧を中心に各国でオーラル・ヒストリー学会（協会）が設立されていった。（例えばアメリカの Oral History Association は 1966 年に、イギリスの Oral History Society は 1973 年に、オーストラリアの Oral History Association of Australia は 1978 年に設立された。）その手法とともにスタンダードや倫理条項も議論され、明文化されてきた。歴史研究者からジャーナリストや実践家、博物館・地域史料館スタッフ等も参加する裾野の広い組織といえる。

主にヨーロッパ圏のオーラル・ヒストリアンは、1970 年代から国境を越えた集まりを開催するようになる。第 1 回のイタリア大会が 1976 年に開催されて以降、2～3 年間隔でヨーロッパ各地で開催されたが、1996 年の第 9 回スウェーデン・ヨーテボリ大会にて、International Oral History Association という組織が正式に発足した。英語とスペイン語を公用語と決め、国際的なネットワークとして発展。設立当時は欧米中心だったが、オセアニア・アフリカ・中南米・アジアにも拡大し、学会誌 *Words and Silences* を発行している。¹

¹ IOHA の詳しい情報は会のホームページ、Facebook、Instagram から得ることができる：
<https://ioha.org/>; <https://www.facebook.com/people/IOHA-International-Oral-History-Association/61552554031622/>; <https://www.instagram.com/ioha.96>.

IOHA Past Conferences (過去の大会 ほぼ隔年開催)

Conference No. / Location / Dates		
• I	Bologna, Italy	1976
• II	Colchester, England	1978
• III	Amsterdam, Netherlands	1980
• IV	Aix-en-Provence, France	1982
• V	Barcelona, Spain	1985
• VI	Oxford, England	1987
• VII	Essen, Germany	1990
• VIII	Siena, Italy	1993

• IX	Gothenburg, Sweden	13-16 Jun 1996
• X	Rio de Janeiro, Brazil	14-18 Jun 1998
• XI	Istanbul, Turkey	15-19 Jun 2000
• XII	Pietermaritzburg, South Africa	24-27 Jun 2002
• XIII	Rome, Italy	23-26 Jun 2004
• XIV	Sydney, Australia	12-16 Jul 2006
• XV	Guadalajara, Mexico	23-26 Sep 2008
• XVI	Prague, Czech Republic	7-11 Jul 2010
• XVII	Buenos Aires, Argentina	3-7 Sep 2012
• XVIII	Barcelona, Spain	9-12 Jul 2014
• XIX	Bengaluru, India	27 Jun - 1 Jul 2016
• XX	Jyv äskyl ä, Finland	18-21 Jun 2018
• XXI	Singapore (virtual conference)	23-27 Aug 2021
• XXII	Rio de Janeiro, Brazil	25-28 Jul 2023
◎ XXIII	Krakow	16-18 Sept 2025
★ XXIV	Macao (up-coming)	2028

5

IOHA 過去の大会と次回開催地のリスト

緑は過去に著者が参加した大会、赤は今回の大会

(パワーポイント資料 著者作成)

私が初めてオーラル・ヒストリーの手法を知ったのは、1981年アメリカのクレアモント大学院歴史学研究科で修士論文に取りかかったときだった。日系アメリカ人を研究するなら(当時まだ多くの一世代高齢者が健在だったので)是非オーラル・ヒストリー・インタビューをすべきだとアドバイザーに言われ、後のOHA会長Enid Douglass先生に手ほどきを受けた。修士論文のあと、ハワイ大での博士論文にも活用し、その魅力に魅せられた私は、その後全米組織のOral History Associationに入会し、数年後はLife Membershipに申し込んだ。いつか日本にもこのような組織ができてオーラル・ヒストリーが広がったらどんなに良いだろうと、かすかな夢を描いた。

国際組織のInternational Oral History Associationが存在すると知ったのは、OHAを通してであった。1998年と99年のOHA年次大会に参加したのだが、そのどちらかで(おそらく99年のアラスカ大会の時)IOHA初代会長M. Vilanova氏にお会いした。当時まだ設立間もないIOHAだったのである。ぼるスペインから宣伝にこられたのであろう。是非加入し、イスタンブール大会にいらっしやいと薦められた。日本からも是非と暖かい言葉をいただいた。そこで2000年頃から(論文投稿で)IOHAに関わるようになり、日本オーラル・ヒストリー学会(JOHA)設立準備を始めると激励をいただいた。

その後日本でJOHA設立が進み、2004年4月のIOHAローマ大会に参加した時にはJOHA設立の報告をして、謝辞を述べた。その大会で私は評議員に選出され、日本からのインプットに期待がかけられていることをひしひしと感じた。(残念ながら私はその直後病氣

でダウンし、任期中に思うような貢献ができなかった。)アジアの国々、特にシンガポールと中国からの会員が大活躍するようになった。2020年のシンガポール大会は惜しくも新型コロナウイルス感染拡大に阻まれたが、1年遅れでオンライン開催された。2023年のリオデジャネイロ大会では対面が復活した。遠路ながら各国から多数の参加者が集い、盛況であった。私は個人報告として採択され、本同窓会会員である今辻三郎先生のオーラル・ヒストリーを発表させていただいた。²

IOHAのすばらしい点は、世界各地からのオーラル・ヒストリー研究者や実践者との交流を通し、それぞれの文化や歴史、そしてオーラル・ヒストリー手法の在り方を学ぶことができることだ。各国の組織の統括団体の役割もありながら、個人として様々な人たちとつながる場となる。会のミッション・ステートメントは次のように掲げている。

- ・ Stimulate research that uses the techniques of oral history
- ・ Promote the development of standards and principles for individuals, institutions and agencies (both public and private) who have the responsibility for the collection and preservation of historical information gathered through the techniques of oral histories, in all forms
- ・ Foster the value of the oral history³

また人々に自らの歴史を語る自由を確保することは民主的運動でもあり、会の重要な役割として、“foster[ing] a better understanding of the democratic nature and value of oral history worldwide”というのも挙げられている。⁴

今回の第23回大会はポーランドの古都クラクフ市が開催地で、Polish Oral History Associationが主催であった。ウクライナ戦争の影響が心配されたが、ポーランドはウクライナ難民を受け入れており、彼らのインタビュー・プロジェクトも行っているのも、民主主義・国際紛争・民族の問題について考える場として意義があった。またクラクフにはユダヤ人地区・『シンドラーのリスト』の舞台シンドラー社が、近郊にはアウシュビッツ収容所があるため、ホロコースト、第二次世界大戦から、パレスチナ問題を考えるにもふさわしいといえる。(私も含め、海外からの参加者の中には大会前後に時間を取り、アウシュビッツ・ビルケナウ収容所に足を延ばしたものがいた。)

クラクフはポーランド第二の都市で、長い歴史を持つ旧市街の街並みは世界遺産にも登録されており、実に美しかった。会場のヤギェウォ大学は、ポーランド最古の国立総合大学(1364年設立)で、コペルニクスがかつて学んだことで知られる。大会開催前日のワークショップは中世を思わせる教室で行われたが、本プログラムの大半のセッションは近代的

² 今辻三郎先生のオーラル・ヒストリーは、本学会報 *The Fulbrighters in Nagoya* No. 32 (2023年2月), pp. 9-22, に掲載。 <https://fbandewc-nagoya.jp/fb/doc/Fulbrighter32.pdf>.

³ International Oral History Association, “About Us-- History and Mission,” <https://ioha.org/about/>.

⁴ 同上。

な別棟（大講堂）の大中ホールや会議室で開催された。ワークショップやセッションの他、ランチ、レセプション、街歩きなども用意された。

IOHA クラクフ大会は“Re-Thinking Oral History”を全体テーマとし、“the crisis of liberal democracy, growing tensions in international politics, climate change with its devastating outcomes on human life, increasing inequalities, wars, and mass migrations”を考えようとの提唱のもと、発表者が公募された。私は audiovisual session（パネル）として、アイヌ民族活動家・作家である宇梶静江氏のドキュメンタリー映画『大地よ～アイヌとして生きる～』を取り上げるセッションを提案した。彼女の語りを通しアイヌ民族の歴史やアイデンティティと伝統文化、自然との関わりを見てもらうだけでなく、制作者からその意図、インタビュー収録と映画編集のプロセスを語ってもらい、世界各地からのオーラル・ヒストリアンと討論できることを目指した。



International Oral History Association 第 23 回クラクフ大会、2025 年 9 月

メイン会場のヤギェウォ大学大講堂前にて（参加者全員ではないが記念集合写真）

出典： IOHA International Oral History Association Facebook

<https://www.facebook.com/photo/?fbid=1194750882681316&set=pcb.1194755399347531>



ヤギェウォ大学構内に立つコペルニクス像
（著者撮影、2025 年 9 月）



IOHA 大会メイン会場のヤギェウォ大学大講堂
大ホールでのセッション（著者撮影、2025 年 9 月）

映画『大地よ』とは

なぜこの映画を選んだのか？2023年8月上旬に私はIOHAリオ大会から帰ったのだが、その余韻冷めぬ9月に、京都シネマでこの映画が上映されていた。宇梶氏の新聞記事を読んで最終日に駆け込んだ。リオ大会ではいくつかの視聴覚パネルに参加し、オーラル・ヒストリーのドキュメンタリー映画を見た。映像を伴うインタビューはパワフルで、たとえ知らない言語のインタビューでも伝わる文化的情報が多かった。日本でもそのようなドキュメンタリー映画があれば、クラクフ大会で上映したいと感じていた。

本作品は宇梶静江氏のインタビューに基づく105分のドキュメンタリー映画で、2022年に完成し、2023年4月29日に初公開された。⁵企画・制作は、歴史学はじめ社会科学全般の専門書や教養書の出版で知られる藤原書店、プロデューサーは藤原良雄社長、監督・音楽・撮影・構成は総合アーティストの金大偉（きんたいい）氏。後で知ったのだが、インタビューだけに2年かけ、生まれ育った北海道の地で彼女が語る言葉と姿、自然環境、アイヌの暮らしを収録したのだという。インタビューをまとめた本は、2020年に『大地よ！—アイヌの母神、宇梶静江自伝』として出版されている。⁶映画がそのあとに作られ、藤原氏はその意図をビデオトークで語っている。

アイヌ民族の歴史に関しては門外漢で、宇梶氏についてほとんど知らずに映画館にでかけたのだが、その映画に彼女の人生全体、そしてアイヌの歴史・文化のエッセンスが凝縮されていると感じ、圧倒された。「これをクラクフでIOHAのメンバーに見てもらいたい！」と強く思った。宇梶氏のパワフルな語りや詩、祈り、音楽は、たとえ知らないアイヌ語であっても我々「和人」の心に響くものがある。日本語もアイヌ語もわからぬ人たちにでも、伝わるものがあるのではないか。英語の字幕があれば助かるだろうが。アイヌの住んできた北海道の地から、彼女は世界に向かって語りかけている。自ら「遺言」と称して、アイヌ（＝人間）が失ったもの、残っているもの、これから守るべきものを、映像を通して残そうとする熱い語りと真摯な姿が感動的であった。オーラル・ヒストリーとのラベルは付いていないが、口承伝統に長けるアイヌ民族が、映画というメディアを味方にし、プロデューサー、監督と三つ巴で作上げたオーラル・ヒストリー・ドキュメンタリー映画だと感じた。映画としても大変完成度が高く、後世に残るに違いない。世界の人々に見てもらいたい。

この感動と熱意から、プロデュースしている藤原書店にメールで連絡を取り、2025年のポーランドの学会で上映し、世界の人にみてもらいたいのですが、とお伺いを立てた。突然の申し出にも関わらず、対応くださった藤原洋亮氏からは「実はちょうど英語字幕の制作に取りかかったところ」と、願ってもない情報をいただいた。「オーラル・ヒストリー」作品として全く意識されておられぬ制作者側の方々は、唐突な申し出に戸惑われたことであ

⁵ 映画『大地よ』オフィシャルサイト, <https://taiiproject.wixsite.com/daichi>; 「藤原映像ライブラリー」藤原書店オフィシャルサイト, <https://www.fujiwara-shoten.co.jp/movie/>.

⁶ 宇梶静江『大地よ！—アイヌの母神、宇梶静江自伝』（藤原書店 2020年）。

ろう。また開催地がクラクフというアイヌには縁もゆかりもない地であったし、パンデミックとウクライナ侵攻の行方も分からぬ2年後のイベントに、不安がおりただただろう。

私のアイデアとして、映画の上映（できれば英語字幕が完成している形で）に加え、プロデューサーの藤原良雄氏（社長）と金大偉監督にはパネリストとして映画の意図や視点・感想などを発表していただき、私は司会と背景説明を担当する形で、audiovisual session にしたい旨お伝えした。宇梶氏は90歳のご高齢で、しかも当時ご入院中だったため、彼女の言葉は映画で十分聞いていただくこととした。まずはIOHAの発表者公募にプロポーザルを提出し、採択されなければ前に進めない。金大偉監督とも連絡を取らせていただき、IOHAの理解とご協力をお願いした。満州族の血をひく金監督ご自身のお話も大変興味深く、120分と時間は限られていても、パネルが実現するのが楽しみであった。

プロポーザルの締切りは2024年夏、結果発表は10月で、幸いにも受諾された。その間、藤原書店も英語字幕作成の作業を続けてくださった。字幕が完成したのはクラクフ大会の1か月前であった。私は研究費が取れるわけではないため、学会参加費やポーランドへの渡航費は自前であり、パネリストに援助できる資金もない。藤原社長と金監督にオンライン（ZOOM参加）でパネリストになっていただく可能性を探った。IOHAの方から会場でのWiFi接続が確約できないため、お二人の発表は事前にビデオ録画し、それを会場で流すようにと言われた。そこでお二人には私の方からお話いただきたい項目等をお伝えし、ビデオ録画は金監督にお任せした。時間制限がある中、凝縮した内容で高画質なビデオを作成していただいただけでなく、しっかりと英語字幕もつけてくださり、とても助かった。

2025年9月がやってきた。羽田空港からまずはロスへ出発する日、私は東京の藤原書店本社にて藤原良雄社長、金監督、藤原洋亮氏とお会いし、対面での打ち合わせの機会をいただいた。その足で空港に向かった。

難儀だったクラクフ到着

ロサンゼルス経由でウィーンに行き、そこからはオーストリア航空の小型機に乗り込んだ。午後2時にはクラクフ空港到着予定で、機体が高度を下げ始めたころ、「急速ウィーンに引き返す」とのアナウンスがあった。理由は明かされず、クラクフ空港がランウェイ事故で急速閉鎖されたせいとわかったのはずっと後のことだった。状況も分からないまま我々乗客はウィーンで一晩足止めされ、翌朝6時半に再度出発。睡眠不足と疲労困憊して、1日遅れのクラクフ到着となった。早めに現地入りしようとした計画が仇になり、難儀なスタートとなった。けれどもようやく実現の運びとなった。

クラクフの街や大学の様子、大会プログラムの詳細もお伝えしたいが、割愛させていただき、ここからは発表セッションの内容をご報告したい。

“Daichiyo (Mother Earth): The Ainu Messages to the World through Shizue Ukaji’s Interviews and Artwork”

我々のセッションは、大会 2 日目の 9 月 17 日 11-13 時、Audiovisual Presentation 2, Session 11 として、中ホール B で行われた。同時開催のセッションが 10 ほどあり、その中にはコソボ紛争や女性をテーマとする興味深いものが含まれていた。『大地よ』の宣伝ポスターを会場入口やエレベータ付近に掲示してもらい、アピールを図った（下記参照）。民族衣装を纏い、きりりとした表情の宇梶静江氏の写真は、目を引いたと思う。ワルシャワ大学の Joanna Wawrzyniak 教授が司会進行を担当してくださった。

観客は大体 13 名から最大 17 名程度であったと思われる。細長く奥行のある階段状のホールで、舞台からは後方の席がよく見えなかった。セッション中に入りがあったが、最後のディスカッション（ラウンドテーブル）の際には 10 名ほどだった。近代的なホールで、結局 WiFi は難なくつながった。ZOOM のアレンジをしておけば、日本の藤原氏・金監督にオンラインで繋がれたかもしれない、と悔やまれた。

120 分のセッションは、山本による発表（概略、宇梶氏プロフィール、問題提起）、藤原氏ビデオトーク、金監督ビデオトーク、映画上映、討論（ラウンドテーブル）という流れを予定していた。映画を多くみてもらえるよう、前半は手短に、スムーズに進むよう努めた。



クラブ大会会場での宣伝ポスター
（藤原書店作成のものに著者が英語挿入）



クラブ大会セッションのパワーポイントから
タイトルページ（著者作成）



クラクフ大会セッションのパワーポイントから
 話し手・パネリスト紹介ページ（著者作成）
 画像の出典：「映画『大地よ』オフィシャルサイト」
<https://taiiproject.wixsite.com/daichi/>

アイヌの歴史的背景

アイヌ民族の歴史は映画の中で紹介されるのと、古代からの歴史を語るには時間も専門知識もないことから、大まかな説明にとどめた。

北海道を中心に北方諸島に住んでいた先住民族のアイヌは、文字を持たない狩猟採集民族で、自然崇拝の文化を持っていた。アイヌとは「人間」という意味である。アイヌ文化の成立は古いが、史料では15世紀から辿ることができ、狩猟・漁労・採集を生業とするほか、本州や周辺地域の人々と物々交換による交易も行っていた。本州からの日本人は和人と呼ばれ、一定地域に住むに、アイヌは自分達の生活を営んでいた。

初期の史料によれば、15世紀中頃にアイヌと和人のいざこざが起り、それが翌年に大きな戦い（コシヤマインの戦い）に発展したとのことで、100年ほど断続的な争いが続く。その後日本の国家統一が進むと、徳川幕府のもと松前藩がアイヌとの交易権を独占し、強権化するにつれ、アイヌは更に追いやられていく。困窮したアイヌは1669年と1789年に蜂起するが、最終的に和睦に応じたところだまし討ちにあい、敗北・制圧される。その後ロシアの南下を懸念する幕府は、アイヌに日本への帰属意識を持たせるため懐柔政策をとったというが、アイヌは国家に属さず生活していた。

ところが徳川幕府が崩壊し、明治維新により日本に近代国家が誕生すると、アイヌの人々の生活が一変した。1869年に蝦夷地は北海道と改名され、日本国の領土と宣言されて、アイヌは土地が奪われてしまう。1872年戸籍制度がスタートすると、アイヌの人々は「平民」の身分をもつ日本国民として、国家に組み込まれる。

さらに1875年には、互いに北海道と北方諸島の領域支配を主張していた日本とロシアの間で、国境画策の末千島樺太交換条約で線引きが行われ、アイヌの先住民族としての土地や資源に対する権利は奪われてしまう。

明治政府が日本の本州などから北海道への移住者を増やし、開拓を進めると、アイヌは生活に困窮する。そこで 1899 年に「北海道旧土人保護法」が制定される。アイヌを「旧土人」と称し、彼らの「保護」を名目に掲げ、あたかも彼らには救いの手を差し伸べるかの印象を与えながら、実際には伝統的生活様式を奪い和人化を強要する同化政策の法律であり、差別が助長されるものであった。いくつもの問題点があった。

土地： 彼らが旧来住んできた土地は奪われ、和人に配分された後の質の悪い土地が農業用地として「下付」された。狩猟民族のアイヌにとって、生活基盤が破壊された。

漁業・狩猟の権利： 伝統的生業が禁止され、収入源を奪われた。また生活に欠かせないサケ、鹿などの捕獲が制限・禁止された。

言語権： アイヌ語の使用禁止、日本語の強要（アイヌ同士でもアイヌ語を使わなくなる）。

伝統的文化の禁止： 入れ墨、熊追いなど、伝統儀式や風習の禁止。

教育： 同化の教育。しかも和人とは別学で、劣った内容・短い期間などの差があった。

就学できない学童もいて、教育の機会が保証されていなかった。

就職： 雇用差別により、学校を出ても就職できない。

このような同化政策により、民族文化・伝統・言語・生活様式・経済活動の糧が奪われ、アイヌは困窮する。また差別と苦難の中、アイヌ民族の誇りも失われたため、多くのアイヌが北海道を去ったが、民族の出自を隠すことが多かった。現在北海道でアイヌと自認して生活する人々は 14,000 人ほどしかいないという。

21 世紀になり、先住民の権利を回復しようとする動きが世界的レベルで進んできた。2007 年に国際連合総会にて「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されると、日本でも徐々に動きがでてきた。2008 年に日本の両国会で「アイヌ民族を先住民の権利を持つ人々として認める決議」を採択され、2019 年になりようやく「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が施行された。しかし、アイヌへの差別や偏見は今日も存在し続ける。彼らへの理解を深め、その社会的地位を向上させるには、まだ長い道のりがあるといえる。

宇梶静江氏の紹介

宇梶静江氏は 1933 年 3 月 3 日、三陸地方大地震発生の日に北海道浦河郡荻伏村字姉茶（うらかわぐん おぎふしむら あざ あねちゃ）という和人混在のアイヌ集落に、6 人姉兄弟の 3 番目として生まれた。家の手伝いをして幼少期～少女期を過ごし、教育の機会に恵まれなかったが、どうしても勉強がしたいという強い向学心から、20 歳で札幌の私立北斗学園中等科に入学し、1956 年に 23 歳で卒業する。けれどもアイヌという理由で就職は見つからず、卒業後には上京する。紆余曲折を経ながら、27 歳で「和人」男性と結婚し、一男一女に恵まれる。⁷この生い立ちは映画の冒頭に、息子で俳優になった宇梶剛士氏のナレーショ

⁷ 詳細は宇梶静江の著作『大地よ！』参照。

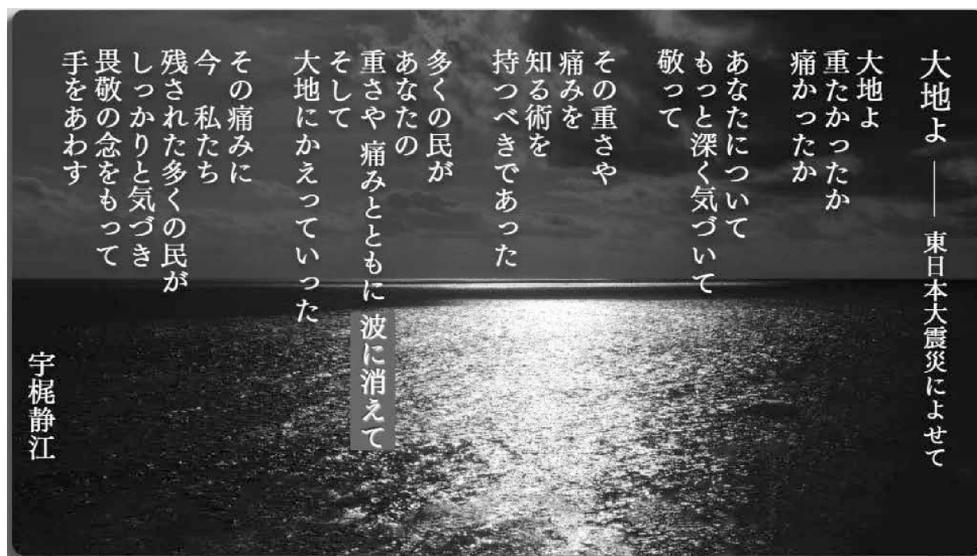
ンで説明される。

北海道を去り、大都会でアイヌの文化や伝統から離れて生きることになる宇梶静江氏だが、自らのルーツに回帰するプロセスがはじまる。下記は藤原書店の説明である。

「72年2月8日、『朝日新聞』「ひととき」欄に「ウタリたちよ、手をつなごう」の投稿が掲載され反響を呼ぶ。首都圏在住の アイヌ結集の契機に。翌年「東京ウタリ会」を設立。96年63歳で一念発起し、アイヌ伝統刺繍の技法を学ぶ中で、ユカラに語られてきたアイヌの叙事詩を表現するぼろ布 による独自の“古布絵”を創出する。以後、古布絵作家として活動を展開。米国、オーストラリア、ドイツ、ロシア等海外の先住民と交流を重ねる中で、世界の先住民としてのアイヌへの思いを新たにする。」⁸

宇梶は詩やアイヌ刺繍を学んだことで自己表現の術を得て、クリエイティブに用いながらアイヌ民族の文化復興と地位向上の活動に身を投じるようになる。古布絵作家としてアイヌの叙事詩を題材にした作品が話題となり、2011年には吉川英治文化賞を受けるが、授賞式予定の当日に東日本大震災が起きる。

自伝と映画の題になる「大地よ！」は、彼女が大震災の一週間後に書いた詩である。⁹「天から降るように」言葉が下りてきたという。



『大地よ オフィシャルサイト』<https://taiiproject.wixsite.com/daichi/%E8%A9%A9>

⁸ 「著者紹介」, 藤原書店オフィシャルサイト, <https://www.fujiwara-shoten-store.jp/SHOP/9784865784862.html>

⁹ 宇梶『大地よ!』、pp.1-4, 349-80.

先住民としてのアイヌを自覚した活動を続ける宇梶氏にとって、大震災はその自覚を一層高めたといえる。大震災は自然への畏怖を忘れ、歴史を忘れた日本への警告で、原発事故は人災であるという。地球は生き物であると考え、自然を敬い、共存して生きていくというアイヌの教えを声を大にして伝えるのがアイヌの果たすべき役割だという、宇梶氏の使命感のようなものが感じられる。

宇梶静江の声を届ける

その宇梶氏の叫びともいえる現代社会への警告は、詩として評価されたというが、彼女のメッセージは古布絵や詩、本の形で表現するだけでは捉えきれず、広まるにも限りがあっただろう。口承文化をもつアイヌの歴史・伝統は、オーラル・ヒストリーとして収録・保存するのが有効だと考えるのは当然であるが、そこには誰がどのような目的で収録するかと、それがどのように現世・後世の人々に届くようにするかが重要となる。海外のオーラル・ヒストリー手法では「dissemination」(拡散・普及・伝播)が重要な一部だと、明示される。これが日本では弱い部分で、インタビューしたものを仕舞い込んだままにしたり、研究者が自分に必要な部分のみ利用してその成果で完結したと考える風潮がある。特に研究者は、話し手の語ったことを彼ら主体に世に残し知らせることに消極的であるといえる。

宇梶氏は自らが「遺したい、伝えたい」と強く願っているのだが、自身が叫んでも伝えるには限りがある。個人の言葉は遥かまで伝わらない。どうやって届けるのか。アメリカのオーラル・ヒストリーを行う組織・団体の多くは、デジタル化されたデータ(インタビューの音声、ビデオ、トランスクリプト)をオンラインでアクセスできるようにしている。(昔は図書館や博物館、アーカイブスに向いて、保存されているテープや紙媒体のトランスクリプトを見る必要があった。)

藤原書店が宇梶氏の言葉を残したいと企画し、金監督に依頼して、2年もかけた壮大なインタビュー・プロジェクトが行われた。(インタビューをどう文字に起こして編集したのかはまだうかがえていない。)膨大な量のインタビューが、まずは自伝として448頁の本になり、2023年にドキュメント映像詩として105分の映画なったことで、それぞれ異なる媒体で拡散できることになった(本は2026年1月に新版刊行)。

それに身を挺したプロデューサーと監督は、どんな思いで、どんな視点から取り組まれたのか。それをパネリストとして話していただくのが目標である。お二人はアイヌではないことはどんな影響があるのか。

プロデューサー、藤原良雄氏について

映画『大地よ』の制作を行ったのは藤原書店で、藤原良雄社長がプロデューサーとして采配を振るった。藤原氏は宇梶静江氏と2016年6月頃に出会った。はじめの印象は「齢八十過ぎにしては、バイタリティのある純朴な方だな」だったが、その後「月に一、二回彼女と面談している内に、この人の半生を、本にしてみよう、映像を撮ってみようという気が湧い

てきた」と藤原氏は述べている。彼の言葉では、『大地よ』は「宇梶静江という一人のアイヌ女性を通して、今先住民アイヌ（人間）の人々が、何を求め訴えようとしているかに迫ったドキュメント」だという。¹⁰

藤原良雄氏は1949年大阪府に生まれ、大阪北野高校から大阪市立大学に進学。卒業後の1973年に上京し、新評論出版社に入社、1980年に編集部長となる。9年後に独立し、藤原書店を設立して社長に就任する。¹¹藤原書店は当初フランスの歴史・文化に関する翻訳書を出版し、フランス政府からその貢献を称え芸術文化勲章等を授与されている。今では国内外の筆者による歴史学・経済学・社会学・女性学など社会科学全般の他、自然科学や芸術分野の専門書や教養書の出版を行う。著者には後藤新平、鶴見和子、石牟礼道子らが含まれる。

彼の会社は「現実の世界や社会を真に理解するために、従来の歴史の見方を問い直す書物」¹²に力を入れてきたが、近年は「思想表現の新しいメディア」としてビデオ制作を手掛けるようになり、2006年からDVDを販売している。¹³

藤原良雄氏のビデオトーク

(IOHA 大会・本講演会で流したビデオトークに、筆者が若干の編集を加えた)

この映画を企画制作した藤原書店の藤原です。この映画をなぜ企画制作したのかを少しお話します。

これを作る前に二人の素晴らしい女性の映画を作りました。一人は鶴見和子さんという国際的社会学者です。この方は生涯着物を着て教壇に立たれた。戦後そのような女性がいなかったが、鶴見さんは美しく、着物を着ていただけでなく、素晴らしい理論を作られた。女性ならではの内発的発展論という理論——社会の発展は一様でなく、それぞれの地域で異なる」という視点——を作られた。もう一人は石牟礼道子さん。水俣病という大変な戦後の社会問題を見事な筆致で描かれた。彼女は水俣に生まれて、熊本と行き来し続け、生涯東京に出ることはありませんでした。石牟礼さんには最後に『春の城』という天草島原事件の長編名作がある。

このお二人の素晴らしい女性の作品を作ったのですが、この度宇梶静江というアイヌの女性の映画を作らせてもらった。宇梶さんはアイヌの部落で生まれ育ち、今は80半ば過

¹⁰ 「Staff プロデューサー藤原良雄『宇梶静江という人』」、『映画大地よ オフィシャルサイト』、<https://taiiproject.wixsite.com/daichi/>

¹¹ 峯和男「私の歩んだ道～出版家業35年 藤原良雄さん@79期」*Rikuryo Web*, 1997-2012, https://www.rikuryo.or.jp/activity/tokyo_club/?p=514.

¹² 「会社概要」、『藤原書店オフィシャルサイト』、<https://www.fujiwara-shoten.co.jp/company/>.

¹³ 「藤原映像ライブラリー」、『藤原書店オフィシャルサイト』、<https://www.fujiwara-shoten.co.jp/movie/>.

ぎで、もうアイヌの最長老といってもおかしくない。しかも女性の視点で、男性とは違うアイヌの暮らしをよくご存じです。アイヌは先住民族であると国際的に紹介され、日本でも認められているが、アイヌ語は日本全国に地名として残っている。特に多いのは東北。北海道ではすべての地域の言葉（名前）はアイヌ語である。要するにアイヌのいろいろなものが残っている。文化伝承を何とか宇梶さんの言葉で、また実際にそこに赴いていただいて残せないかということで、この作品を作らせていただいた。まだまだ取り足りないところもありますが、そういう言う意味で千変を付けるようないい作品に仕上がったのではないかと思います。ご覧いただければ幸いです。

監督、金大偉氏について

監督、音楽、撮影、構成を担当したのは、総合アーティストの金大偉氏である。多彩な作品や活動をされており、藤原書店からは宇梶氏の『シマフクロウとサケアイヌのカムイユカラ（神謡）』（2021）のDVD作品も出版されている。

金監督は1964年中国遼寧省の生まれで、父は満洲族の中国人、母は日本人である。13歳で来日した。多摩美術大学卒業後、「独自の技法と多彩なイメージーションによって音楽、映像、美術などの世界を統合的に表現」する総合芸術家として国内外で活躍している。

金監督は、映画のオフィシャルサイトで宇梶氏について、次のように述べている。

「宇梶さんはシャーマンであると思う。多くのインタビューによって様々な思いや情感を表出し、大自然の意識やそのエネルギーを憑依させて、力強く人間と自然との調和や共生の形を訴えている。アイヌの人々が守り伝えて来た良き文化や生きるための知恵。共生、共存への統合意識を、私たちに伝えようとしている。古き文化の伝承であると思う。混迷している現代社会、不安定な世界情勢、自然が破壊され続けている中、今こそ「調和」へ向かうべき時期であると言えよう。戦いと分離の形ではなく、民族の違いにおける境界や壁を超えることによって、真の生きる姿や共存が誕生し、切実な平和世界が訪れてくるのであろう。」¹⁴

自らの出身である満洲族もその民族と文化が失われつつある。映画『天空のサマン』では満洲族を扱った。「私たちは、調和のとれた自然に導かれて、失われゆく民族の良き意識やアイデンティティーを取り戻すことが、世界において、すべての民族の共同意識であるように思う」と述べている。

『大地よ』では「アイヌの文化や古代から伝承された知恵を通して、カムイと人間と自然と見えない世界との『共生の姿』を、素直に、映像と音の力で描いた」と語り、それを「とても貴重な制作体験」と呼んでいる。

¹⁴ 「映画『大地よ』オフィシャルサイト」。

金大偉監督のビデオトーク

(IOHA 大会・本講演会で流したビデオトークに、筆者が若干の編集を加えた)

こんにちは。監督の金大偉と申します。アイヌの今回の映画について、いろいろと話したいと思います。

この映画の切っ掛けですが、2017年に宇梶静江さんに藤原書店の藤原良雄社長から紹介いただきました。藤原書店より宇梶さんの本が作られたのですが、そのすぐ後に、「じゃあ映画でもできたらいいかな」ということで、プロデューサーの方〔藤原社長〕から話をいただきました。

私は最初アイヌとの接点はどこにあるかなと、自分の立場もあり、監督としてこの映画の内容に入り込まないといけないので、そこがとても重要なことでした。私は出身が、父が満州族で母が日本人です。満州族は北方民族でアイヌと似ているんですね。非常に共通点があり、両方とも北方民族であって狩猟民族でもあるんです。信仰もほぼ一緒に、アニミズムあるいはシャーマニズムです。しかもアイヌの文化の中にも、今そういった伝統的なものがほぼ失われていっている。もう一つはアイヌ語です。アイヌのことばを話す人ほとんどいない。私の自分の民族のルーツの中でも、満州語を話せる人がほとんどいない。どちらも同じような状況になっている。この同じような立場、共通点があった中で、自分はこの映画にとっても入りやすかった。そこで一所懸命アイヌの文化を勉強して、そして宇梶さんの話をいっぱい聞いて、たくさんのことを学ぶことができました。

そこで2018年にやっこの映画をスタートしました。映画を撮るときに、何回も何度も北海道に行って、宇梶さんのインタビューをいっぱい収録しました。宇梶さんの話はとてもインパクトがあって、アクセントがあって、アイヌの持っている古き知恵をいろいろ話してくれました。宇梶さんはシャーマン的なタイプでもあって、いろんな話が出てくる。突然すごい話がでて、「ああ、こんなことも話してくれるんだ!」というような驚きもあった。こういう部分を全部映画の中に一所懸命収録して、編集していく上での構成が大変だった。構成の中に、アイヌの持っている精神性、あるいはアイヌの文化が持っている力とかを、いかに映画を通して表現できたらいいかなと思って、宇梶さんとのコミュニケーションをたくさん取りました。

やはりフィールドワークですよ。監督として、現地に行って、フィールドワークをしなければいけない。現地を体験しながら、それでアイヌの文化を理解しながら、映画を作っていくことが、私の映画の作り方でもあり、結構時間がかかりました。編集と撮影を入れて、全部で4年間かかりました。4年間というのは普通のドキュメンタリーよりも〔ずっと長いだけども〕、アイヌの持っている精神性、エネルギー、魂を映画の中で伝えたいというのが私の思いであります。

やはりグローバリズムの社会に今なりつつあり、何もかも同じようになり、民族の持っている独自の文化が見えなくなってしまうのが、とても残念な現在の社会でもあります。そういう意味で、アイヌの民族をとおして、私たち自身の文化とアイヌの文化を照らし合

倫理的だとされる。それはまなざしでもあるが、手法として「当事者の語りを後世に伝える」ことを目的とする姿勢なのだ。それゆえマイノリティ研究に相応しいと言われる。

藤原良雄氏と金監督はアイヌではないが、映画を見る限りの印象では、宇梶氏が自らの「まなざし」を主張できるよう、十分に配慮されていたように思われる。映画のオフィシャルサイトに載せられている映画評論家の四方田犬彦のコメントでは、「映画『大地よ アイヌとして生きる』が主眼としているのは、彼女のメッセージをいかに正しく、その豊饒(ほうじょう)の相において再現するかということである」と、金監督を評価している。¹⁶

金監督が自身のメッセージで述べられているように、アイヌ民族と満州族には多くの共通性があり、この映画に入りやすかったということで、彼女の目線に合わせられたのだろう。宇梶氏の言いたいことをできる限り正確に伝えたいと大変な努力を重ねたことも、重要な要因であろう。

IOHA セッションでの反応と評価

我々の120分のセッションでは、私がまず10分ほどの概要説明した後、藤原氏の略歴とビデオトーク、金監督の略歴とビデオトーク、次に映画を上映した。(時間制限のため途中2箇所ほど割愛するがほぼ最後まで上映できるはずであったが、15分残る辺りで、司会者から討論の時間を確保したいとの指示があり、残念ながら割愛した。)映画上映時間は75分ほどであったと思うが、参加者に全体像を感じてもらうには十分であった。

討論では、数人からのコメントや質問があった。

- ・宇梶氏の語り力が強く、大変よかった。
- ・アイヌについて何も知らなかったので、この映画を見ることができて多くのことを知ることができ、とても良かった。
- ・映像と音楽、インタビュー内容が素晴らしかった。
- ・もっと多くの人々に見られるべきである。

質問としては、アイヌは現在どうなっているのか、日本政府の方針はどのようなのか、と問われた。全体として、オーラル・ヒストリーを質の高いドキュメンタリー映画として作り上げた藤原書店の努力は報われたといえる。宇梶氏が生まれ育った北海道の地で語った彼女の記憶、アイヌの伝えてきた伝統や知恵が、ポーランドの地に集った各国の人々に英語字幕に助けられ、彼女の声で届いたといえる。言葉を超え、彼女のエネルギーが伝わったのであろう。

最初にアンケート用紙を配布していたが一人で立ち回っていたため、回収する時間がなかった。後ほど「素晴らしい映画だったので、アンケートをしっかりと書いてから渡したいと思ひ、持ち帰ってしまった。遅くなったけれど渡したい」と手渡してくれたアメリカ人の女

¹⁶ 四方田犬彦「独力で人生を切り開いてきた宇梶静江」, 映画『大地よ』オフィシャルサイト, <https://taiiproject.wixsite.com/daichi/解説>.

性教授がいた。そのコメントでは、

- ・ “Excellent! Consistent, deep, inspiring”
- ・ “It is a beautiful film that should be shown and discussed as much as possible.”
- ・ [On portrayal of rituals, lifestyle and nature] “Well thought out and powerful”
- ・ [On Ukaji as the main subject] “Strong; so many layers of such universal human values”
- ・ [Use of languages] “Excellent—appreciate the way languages, voices are well integrated”

等々、賞賛の言葉が書かれていた。時間が足らず全部見られなかったのが残念だと、そして “Thank you for presenting this beautiful film at IOHA” と締めくくられていた。口頭でも、とても良かったと関係者に伝えてほしいと言付けられた。

つまり、日本語の本として『大地よ！』出版しているだけでは、宇梶氏のパワフルなメッセージを他の国々の人々に届けるのは難しいが、この見事に編集された映画の形となったことで、宇梶氏のメッセージ、そしてアイヌの伝統と知恵は、地球の遠いところにも瑞々しく届くことができた。そう評価できるほど、ポジティブな手応えを感じたのであった。

すべては、宇梶静江という語り手がほとぼしるように発するアイヌとしての思い、自らの生い立ち、記憶を、映像を伴う音声として記録し、それを本以外の形でも、できるだけ多くの人に届けたいという藤原書店の一念から始まった。彼女の心髄に 90 年ほどの年月をかけて蓄積・保存されてきた、アイヌ民族の歴史・文化・伝統や誇りが、言葉として出てくるのをくみ上げる人がいなければ、消えてしまう。また、録画録音しただけでは、ほとんど知られることもない。藤原書店と金監督の手を経て、宇梶氏の内にあるものが、audible and visible(可聴化かつ可視化された)永久保存版の形になったといえる。

オーラル・ヒストリーがこれほど完成度の高いドキュメンタリー映画になったことで、これが世界中に拡散され、また後世に保存されていく可能性は大きい。アイヌ民族の精神文化が失われることなく、つながっていくための重要な役割を果たすに違いない。

まとめ（付記）

今年度の名古屋フルブライト・アソシエーション/EWC 中部同友会の講演会にて、IOHA 第 23 回大会参加についてご報告する機会をいただき、ありがとうございました。帰国後すぐ秋学期の授業がスタートしたので、大会や自分の発表について振り返る余裕がありませんでしたが、今回の講演の準備とそのまとめを書くことで、思い起こし整理することができました。

講演では映画上映に時間を割き、それがハイライトであったため、このエッセイだけでは宇梶静江氏のメッセージの内容はあまり伝わらないかもしれません。また映画も一部しかお見せできていません。いつか上映される場合や DVD が入手できる時になったら、是

非とも全編ご覧いただけることを願っております。全編みること宇梶氏の人生全体、アイヌ文化と精神性がしっかりと伝わってくることでしょう。

私自身はアイヌの歴史・文化についてはまだまだ学ぶことばかりなので、皆様の前でお話したり、それを文字にさせていただくのは大変僭越であり、恐縮しております。大会参加報告ということで、IOHAの雰囲気と映画『大地よ』のエッセンスが伝われば嬉しく存じます。

末筆ながら、IOHA大会発表のため多大なご配慮とご協力を賜りました、宇梶静江様、藤原書店の藤原良雄社長と藤原洋亮様、金大偉監督に、心より感謝申し上げます。また、今回この名古屋での講演会をアレンジしてくださいました塚田守先生と、お忙しい中ご参加いただいた会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

3. 会務報告

名古屋フルブライト・アソシエーション 総会

(2025年11月8日)

報告

① 会員の実態

2023年度総会で、お知らせをすべてメールで行うことが決定されたが、その結果、名古屋フルブライト・アソシエーションとして登録されていた66名が、実質的に、27名になりました。また、日本イーストウエストセンター中部同友会の人数が21名（名古屋フルブライト・アソシエーションメンバー5名を含む）が13名（フルブライト5名を含む）に変更になりました。二つの組織が毎年一緒に行動することになっています（2024年11月9日確認）。2024年度会費納入人数=9名

② 2024年度（2024年4月から2025年3月）の事業報告

以下のように、講演会が行われました。

2024年11月9日（土曜日）

椋山女学園大学外国語学部棟416教室

14:00～14:45 総会

15:00～16:00 講演会

16:00～ 懇親会（星が丘テラスの居酒屋など）

2024フルブライト講演会（Nagoya Fulbright Association）

日時・会場：11月9日（土）15時から約一時間、椋山女学園大学

演題：Have Fun!：国際社会（言語と文化と人間）の狭間で枠を飛び出すスタイルを求めて

講演者：四国学院名誉教授 加瀬豊司（Toyoshi Kase, Ph.D.） All-expense Fulbright Graduate Program 1974-76

参加者は、46名

- ③ その他：Fulbrighter in Nagoya no.34 は、2025 年 3 月ごろに、ホームページにアップしております。なお、Fulbrighter in Nagoya no.34 は、ホームページにアップすると同時に、添付ファイルで全員（名古屋フルブライト・アソシエーションおよび日本イーストウエストセンター同友会メンバー）に配布しました

審議事項

- ① 2024 年度の決裁書（別表 1）にありますように、赤字が出て、事務局補填になっていますが、今までの日本イーストセンター中部同友会や名古屋フルブライト・アソシエーションの預金の残金から出金が可能です。
- ② 2025 年度事業計画予算（別表 2）にありますように、紙媒体によるお知らせを止めることで、支出が 60000 円になっています。メール会員の 27 名のうち 20 名が会費を支払ってくだされば、会の運営が可能になりますので、ご協力をお願いします。
- ③ 役員案

役員（2025 年～2027 年度）案

会長・事務局

塚田 守（椋山女学園大学 名誉教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学 名誉教授 1989-91）

山本恵里子（元椋山女学園大学教授・元全米日系人博物館プロジェクトマネージャー 1998）

幹事

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

川島正樹（元南山大学教授 1995-1996）

藤本 博（元南山大学教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学 名誉教授）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

地村みゆき（愛知大学経営学部 准教授 2011－2012）

別紙 1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2024年度決算書

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
会費	27,000	3000 X 9	講師謝礼	0	
事務局補填	30,908		サーバー・ドメイン	41,250	
			ニューズレターの発行34号	15,158	
			会場費	1,500	
			通信費	0	
計	57,908			57,908	

2024年度収支決算につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事

地村 みゆき



2025年11月8日

別紙2
名古屋フルブライト・アソシエーション
2025年度事業計画予算

	金額	摘要	支出	金額	摘要
会費	60,000	3000 X 20	講師謝礼	5,000	
			サーバー・ドメイン	41,250	
			ニューズレターの発行34号	10,000	
			会場費	1,500	
			通信費	2,250	
計	60,000			60,000	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、**2012年10月14日**

第1章 総則

第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティアー
 2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティアーで日本に滞在しているアメリカ人
 3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者
 4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者
 5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティアーへの指導、援助
3. 日本に滞在するフルブライトグランティアーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助
4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認
2. 役員を選出
3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の新選を妨げない。

第5章 会計

第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条 正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は1口 年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000円とする。

第14条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

役員（2025年～2027年度）

会長・事務局

塚田 守（椋山女学園大学名誉教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学 名誉教授 1989-91）

山本恵里子（元椋山女学園大学教授・元全米日系人博物館プロジェクトマネージャー
1998）

幹事

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

川島正樹（元南山大学教授 1995-1996）

藤本 博（元南山大学教授 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学名誉教授）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

地村みゆき（愛知大学経営学部 准教授 2011-2012）

発行年月日

令和8年2月10日

発行

名古屋フルブライト・アソシエーション

〒470-0134 愛知県日進市香久山1丁目3403の3

塚田守方

電話：090-5863-2325

Email: mamoru@sugiyama-u.ac.jp

URL : <http://fbandewc-nagoya.jp/fb/>

印刷

ツゲ印刷株式会社 電話：052-621-2716